

# 槐

かい

岡井省二創刊

平成18年10月号

平成十八年十月一日発行 第十六巻第十号  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

通巻第一八四号（毎月一回一日発行）



真髓

高橋将夫

青梅雨の夜歩き地蔵深眠り  
炎天下すこやかに児の育ちゆく  
消えぬ間に次のが開く花火かな  
二の舞はしないつもり夏の蝶

雲海を渡つてゆきし影法師  
前世につながつてをる蟬の穴  
やがて来るその日を思ふ誘蛾灯  
涼風にゆるる神秘のベールかな  
革蒲団残つてゐたる宴の果  
うつろからうつつへと虹かかりたる  
青蘆の真髓に触れゐたるなり

# 別の風吹く

谷村幸子

小面やひらきそめたる白桔梗  
松の空はればれ夏書してゐたる  
花どきの開門早し蓮の寺  
観世音大賀蓮てふ香をもらふ  
鯉の背をついと水蜘蛛わたりけり  
河童忌の水ややにごる地藏川  
三伏の切り株にある木の齡  
経称ふ霧の摩耶山天上寺  
大椋に別の風吹く涼しさよ  
千年の櫟にをるは木葉木菟

## 特別作品

岩座の滴りに星匂ひけり  
石像の涅槃にふれて灯の涼し  
無摩那室にて憂華の台しみじみ葉月なり  
芭蕉葉のゆつたりゆるる花つけて  
風いでし観音山の銀河かな  
二百十日乾拭きたる床柱  
父と子が歌ひゆく道夜の秋  
闇に浮く六波羅蜜寺万灯会  
その日草繰り言いわぬ人なりし  
大らかに風うけとめて芙蓉さく

# 槐安集

市場基巳

隠し田の一枚目にして虻喰る  
筒鳥を聞きあるのみの村さやか  
朴に気づくは緑山中の我ひとり  
雨乞虫水音いづくよりひびく  
金比羅に行かむ卯の花腐しても

水野恒彦

出奔のこころ消えたる瀧の前  
生涯のしまひは寝かす卯浪かな  
落魄のはなしなどして湯帷子  
海光のひろごりやまぬ昼寢覚  
胸もとにわたつみ匂ふ星祭



延広禎一

風穴涼し死火山の息づかひ  
三国志繰るやゼリーの揺れ止まず  
水占の透きて袖振る揚羽かな  
里坊に朽ちし水桶苔の花  
御墓おんびきが恋の座にをり澄しをり

加藤みき

海中へむかふ階段雲の峰  
緑濃し森の奥処の小さき池  
暗闇へ滴りつづけ岩育つ  
一つ葉のペリーダンスや讃岐岩  
炎昼の風の抜けゆく葉蘭叢

石脇みはる

レモン手に潮の流れを読んでをり  
桔梗や幻住庵と石山寺  
芋虫の這ひ出してをる室津かな  
あらはれし海石いくりの数や盆の風  
石切石切神社や青鬼灯の鉢二つ

中島陽華

愛染さんじや宝恵籠じや夏の冷え  
ががんぼや上座の似合ふ淋しさよ  
梅ひとつ落ちて天満の晴れにけり  
多羅葉の茂り教会め空青し  
この家にゆつくりとをり優曇華よ

竹内悦子

水打つて水の面テの柳かな  
大楠や夏の天より鳥の糞  
石の上の大蟻弘法大師かな  
二糶センチの金の恵比寿と麻袋  
天の川ひとりの部屋の柱かな

栗栖恵通子

歩き神冥き日傘を折り畳む  
水底の魂蹴つてういてこい  
干草のくぼんでケンタウロスかな  
三伏や「へ」の字に開く肋骨  
紅筆の先均しをり星祭り

大島翠木

長生きや孟宗皮を脱ぐところ  
反転の緋鯉に膝を濡らさるる  
真向ひし滝へ女の深まなざし  
天の川ハムには糸のきりきりと  
掃苔や昨日より雲やはらかし

雨村敏子

アイスワインのオン・ザ・ロックや瑠璃蜥蜴  
あめんぼう命の水を蹴りにけり  
観音の胸のふくらみ青胡桃  
とうすみの水の星より生まれける  
鬼瓦の目ン玉抜けし青嵐

黒田咲子

亀の子の大悪日の泡かな  
半夏降る掌に揉む胡桃ねぼねぼの  
田草取足の大きをはにかみて  
唇や螢袋や濃むらさき  
あおあおと葛鉄砲の葉はありぬ

小形さとる

肉皿のほか夏霧の中にあり  
青野にて肩のあたりの骨鳴らす  
海霧をのこ引いて満艦飾の男なり  
ががんぼの足かと思ふなにもかも  
パウロ祭まだまだ産毛生えてくる

本多俊子

白縮緬ゆふがほの花天に浮く  
兜虫火星に竜巻ありにけり  
黒揚羽南大門をくぐりけり  
大黒柱語りかけくる涼しさよ  
みどりごの口のまあるく桃熟るる

天野きく江

水分や舌もつれずに熊蟬は  
頂の洞より出し夏の蝶  
無花果を運ぶ黄道なりしかな  
大百合の香や六畳を満たしけり  
右脳のもんどりうつて秋隣



# 槐市集

久保東海司

一劃の山葵田滝のこだまかな  
青鷺や波立つ程の流れなく  
大ぶりの琥珀の渦のかたつむり  
讚美歌や梅雨晴れの雲殺到す  
点滴の雫を数へ吊忍

近藤きくえ

笈摺に朱印の濃ゆく夏さびぬ  
石棺のひかりよぎりて蜥蜴消ゆ  
せはしげに扇使ふや道しるべ  
滝音を背にしてよりの足かろし  
雲きれて最古の蓮の息吹かな

近藤公子

大茄子ズドンと丸焼きしたりけり  
蟬の声棚田をころげゆきにけり  
穀象や何も飛ばない空ありて  
団子虫ひつくり返つて笑ふ夏  
文月や胸の奥なる結び文

近藤紀子

築地松に梅雨の雨つぶ出雲かな  
白壁の向かう青柚の鈴生りに  
合歡の花に山鳩の聲妣のこゑ  
溝萩の花のこぼれて厨まで  
夏木立誰かに呼ばれてゐるやうな



# 槐集

## 高橋将夫選

白百合を打つ雨へラの妬心かな 岡崎

近藤 喜子

万緑の奥の一吹き魑魅かな 枚方

中野 京子

蟬の穴ワームホールに続きゐる

ワームホールは遠くの世界への抜け道

若者に未完の気負ひ草いきれ

石を置く水盤おほひなる宇宙

涼風や身よりはがれてゆきしもの

天帝に頬紅付けよ合歡の花

岡崎

岩月優美子

大暑かな体の芯に棒立てて 安城

近藤 公子

向日葵やゴッホの魂の生き続き

空蟬の転び綿津見命かな

六大のまん中に咲く蓮の花

雲が雲押し上げ日光黄菅かな

青鷺や濁つてをりし天之川 京都

竹中 一花

風匂ふ名越神楽の暮れにけり 枚方

近藤きくえ

雀啼く銀河の夜明けなりしかな

梅雨出水流れぬ川を覗きをり

白南風と黒南風の間の辻の風

身火照りを鎮めて髪を洗ひけり

砂山の波に消えたる雲の峰

白

# 銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」観照

涼風や身よりはがれてゆきしもの 近藤 喜子  
肌にふれてゆく涼風はさわやかなもの。ところが、作者は身から何かがはがれてゆくのを感じている。表皮の体温が奪われるなどと言っては詩情を欠く。生理的な感覚が精神的な喪失感をおよぼさすところに注目したい。心が感じているのである。作者ならではの感性。

雲が雲押し上げ日光黄菅かな 岩月優美子  
入道雲が湧く夏山と日光黄菅が群れ咲く美しい高原の景が浮かび上がる。「雲が雲押し上げ」が雄大に成長してゆく入道雲の様子をよく捉えている。日光黄菅は次々に咲いて花期は長い、花それぞれは一日でしぼむ。刻々と姿を変えてゆく入道雲と重なって響きあうものがある。

雀啼く銀河の夜明けなりしかな 竹中 一花  
銀河の美しい夜が明けてゆく大景の中の雀がなんともつましい。「宇宙に雀の鳴き声」という大仰なものいいのだが、そんなけれん味を感じさせず、素朴。天の川でなく銀河なもの、湿気がなくて好感がもてる。

万緑の奥の一吹き魍魅かな 中野 京子  
万緑は陽で緑陰は陰が本情で、普通。掲句は上五に万緑を据え、

一転して緑陰の陰を詠んでいるところがユニーク。万緑の強烈な明るさと緑陰の魍魅が一句の中で鮮やかなコントラストをなしている。

大暑かな体の芯に棒立てて 近藤 公子  
炎天下にすつくと立ち、誇らしげに咲く向日葵。そんな向日葵に添え木がしてある景が浮かんできて、思わず苦笑してしまった。この体にも心棒がほしい：大暑の心境がひしひしと伝わってくる一句。

蛇現れて話変りし神の山 近藤きくえ  
蛇が突然出てきて大騒ぎ。今までの話はそっちのけになってしまったが、いったいどんな話をしていたのだろうか。ありそうな景だが、神の山に蛇が出てくるというシチュエーションは面白い。

息災や涼み神楽と福の餅 谷村 幸子  
神楽を見て涼んだ上に福の餅まで出て、無事息災というからこれ以上のことはない。これだけめでたさを重ねられても素直に受け入れられるのがこの句のよろしさ。

冬瓜の蔓天王山に向ひをる 植木 戴子  
冬瓜の蔓の伸びている方向がたまたま天王山の方だったということだろうが、「冬瓜」と「天王山」が何かを暗示しているように興味をそそる。

袋角五劫思惟せる阿弥陀佛 瀬川 公馨

永劫を五つも重ねたほど長い間、思惟する阿弥陀如来像が京都の椿寺にある（東大寺勧進所にも同形像あり）。この如来はおたく顔の日本的美女である。鹿の袋角との取り合わせがなんとも曰く言い難い。

雲の峰崩れて外道に走らむか 西村 純太  
雲の峰の崩れるさまをみていると、なるほど外道に走るさまにも見えてくる。〈雲の峯幾つ崩れて月の山 芭蕉〉とはえらい違いである。

生き死にの話 鯨がよう判る 南 一雄  
生き死にの話聞いてフムフムとまるで悟ったように鯨がうなずいている図が浮かんでくる。水底で思惟にふける輪なら全て悟っているのかもしれない。したり顔の輪はまさに俳諧。それにしては生死は永遠の課題。

火宅出で遠蛙聞く一夜かな 近藤 紀子  
火宅は俗世、娑婆のこと。遠蛙を聞いていることから推測して、なにかしらのわずらわしさを避けて外へ出た程度のことかもしれない。ともかく遠くの蛙の鳴き声を聞いている眼前には田畑か野原か、ひろびろとした世界が広がっているのだと思う。

天地の梅雨ぬぎすてる峠かな 大山 里  
峠で見る梅雨晴れの空。晴れ渡った山々と眼下の村々をみたときの気分はまさに梅雨の鬱陶しさを脱ぎ捨てた感じだったのだらう。

三伏の粥に米炊くひとにぎり 十川たかし  
一人で粥を炊いて食べる。近ごろ珍しい佗び、寂びの世界。いや、それだけではない。三伏なのである。三伏は夏の間の三回の庚（あ）の日で、金は火に伏せられることから凶とされ、種まき・療養・遠行・男女の和合など全て慎むべき日とされている。ただことではないのである。

睡蓮や口の動いて声となる 万城希代子  
話すときは口が動くのは当然のことだが、あたりまえのことをわざわざそう認識したところに、あたりまえの不思議を感じる。睡蓮の咲く静かな池の景であってみれば、なるほどどうみてもなされることしきり。

竹箒ねかせり蟬のうすみどり 松原 仲子  
竹箒と蟬。どこか懐かしい田舎の景。〈うすみどり〉が一句に色を添えている。蟬といえば油蟬など茶色が想起されるが、みんみん蟬などは透明な翅と緑の翅脈が印象的。生まれたての蟬は白とうす緑である。

沢蟹ゐる大仏殿の真裏なり 中田 禎子  
沢蟹の出たところが大仏殿の裏でよかった。仏の大きな慈悲の背後でせかせかと歩き回る沢蟹。写生の景がそのまま〈存在〉を捉えた精神の景になっている。

風ありて曝書の中の列女伝 岩下 芳子  
夏ふくろう人恋しくて出かけたなり 鈴木勢津子  
サンガラス心の起伏のぞかれず 加藤富美子

合飲の花夢の色して咲きにけり  
かの世から棕に来てをる青葉木菟  
壽夏帯締めて旅立てり  
怪しきは通さぬ構へ黄金蜘蛛

醍醐季世女  
富松 寛子  
谷岡 尚美  
渡辺ひろし